

第十七回おのみち文学三昧 研究発表会 令和七年十二月六日(土) 於 しまなみ交流館

『太平百物語』における幽霊の特徴―『伽婢子』との比較を中心に―

芸術文化学部日本文学科三年 二〇二三二〇一五 金光七穂

#### 【発表要旨】

夜に人々が交代で怪談を語り百本の蠟燭を一話ごと消していく百物語怪談会は、最後の蠟燭を消した時に何かが現れるとされていた。この百物語怪談会をモチーフとした百物語は近世で多くの作品が生み出され、様々な怪異が登場するが、本発表では特に幽霊に注目した。

百物語作品の中で足のない幽霊が登場するのは『太平百物語』が始めであり、他の百物語では幽霊の足の有無に関する記述が全くないものや、挿絵では幽霊の足が明確に描かれているものもあった。そこで、本発表では『太平百物語』に収録される「十作ゆうれひに頼まれし事」と「三郎兵衛が先妻ゆうれいとなり来たりし事」の二話に注目し、『太平百物語』の幽霊の特徴について考察する。

本発表をとおして『太平百物語』の幽霊話は『剪燈新話』や『伽婢子』から一途な愛情を持つ幽霊話の特徴を受け継いでおり、また『太平百物語』の足のない幽霊は百物語以外から影響を受けていることなどを明らかにする。

1

#### 【発表次第】

一、研究テーマと先行研究

(一) 研究テーマ

(二) 先行研究

二、作品梗概

三、『太平百物語』幽霊比較

(一) 『太平百物語』と『伽婢子』の比較

(二) 足のない幽霊

四、まとめ

五、今後の課題

六、参考文献

## 一、研究テーマと先行研究

### (二) 研究テーマ

#### ○百物語作品（上段）

※下段の『伽婢子』は百物語作品ではない。

- ・一六五九年(万治二年)：『百物語』
- ・一六七七年(延宝五年)：『諸国百物語』
- ・一六八六年(貞享三年)：『百物語評判』
- ・一六九二年(元禄五年)：『諸国新百物語』
- ・一七〇一年(元禄十四年)：『好色百物語』
- ・一七〇六年(宝永三年)：『御伽百物語』
- ・一七三二年(享保十七年)：『太平百物語』
- ・一七五一年(寛延四年)：『古今百物語』
- ・一七五一年(宝暦元年)：『万世百物語』
- ・一七六二年(宝暦十二年)：『当世百物語』
- ・一七六七年(明和四年)：『新説百物語』
- ・一七七〇年(明和七年)：『近世百物語』
- ・宝暦年間：『花実百物語』
- ・明和年間：『実説百物語』
- ・刊行年不明『聖泰百物語』
- ・刊行年不明『近代百物語』
- (出版不明：刊行予告はあるが出版未詳。)
- ・出版不明：『文武百物語』
- ・出版不明：『野傾百物語』
- ・出版不明：『拾遺百物語』

右に示した百物語作品は太刀川氏(※注一)が列挙していたものを参考にした。これらの作品の中でも特に『太平百物語』と『伽婢子』に注目する。

三頁の表は、題または文章中に幽霊(平仮名表記も含む)という記述が見られ、さらに勘違い・間違いとして登場した幽霊ではなく、物語中で本当に幽霊と認識されている話のみをまとめたもの。資料四頁には百物語作品でみられた幽霊画を載せ、幽霊を赤い矢印で指している。

・一六六六年(寛文六年)：『伽婢子』（平仮名表記）

※注一 太刀川清『近世怪異小説研究』（笠間書院、一九七九年）

表は幽霊の足の有無、および資料六〜七頁で詳述する特徴①（幽霊に子供がいる。）、②（夫が他の女性とも関係を持っているが後妻打ちの展開にはならない。）<sup>うわなりう</sup>についてまとめたもの。

作品名	巻	足の有無	①	②
『諸国百物語』	巻一「十七 本能寺七兵衛が妻の幽霊の事」	足あり	×	×
	巻二「十六 吉利支丹宗門の者の幽霊の事」	足あり	×	×（そもそも男女の関係がない）
『好色百物語』	巻四「一 端井弥三郎幽霊を舟渡しせし事」	足あり	×	×（後妻打ち）
	巻四「七 筑前の国三太夫と云ふ人幽霊とちぎりし事」	記述なし	×	×
『御伽百物語』	巻四「十三 嶋津藤四郎が女ぼうの幽霊の事」	記述なし	×	×
	巻五「十四 栗田左衛門介が女ぼう死して相撲を取りに来たる事」	足あり	×	×（後妻打ち）
『太平百物語』	巻四「をんなの幽霊男のもとへ通事」	記述なし	×	×
	巻四「死霊後妻を喰殺す事」	記述なし	×	×（後妻打ち）
『新説百物語』	巻三「女智略之敵打」	足あり	×	×
	巻二「幽霊昼に出でし事」	記述なし	×	×
『近代百物語』	巻四「沢田源四郎幽霊をとぶらふ事」	記述なし	×	×
	巻二「三 箱根山幽霊酒屋」	記述なし	×	×
『御伽百物語』	巻五「一 巡るむくひの車の轍」	曖昧な足の描写	×	×
	巻二「二十四 十作ゆうれひに頼まれし事」	足なし	○	×
『太平百物語』	巻四「三十五 三郎兵衛が先妻ゆうれいとなり来たりし事」	足なし	○	○（後妻打ちにならない）
	巻二「二十四 十作ゆうれひに頼まれし事」	足なし	○	×

『新説百物語』	巻二「幽霊昼に出でし事」	記述なし	×	×
	巻四「沢田源四郎幽霊をとぶらふ事」	記述なし	×	×
『近代百物語』	巻二「三 箱根山幽霊酒屋」	記述なし	×	×
	巻五「一 巡るむくひの車の轍」	曖昧な足の描写	×	×
『御伽百物語』	巻三「女智略之敵打」	足あり	×	×
	巻二「幽霊昼に出でし事」	記述なし	×	×
『太平百物語』	巻四「三十五 三郎兵衛が先妻ゆうれいとなり来たりし事」	足なし	○	○（後妻打ちにならない）
	巻二「二十四 十作ゆうれひに頼まれし事」	足なし	○	×



『近代百物語』「巡るむくひの車の轍」



『太平百物語』「三郎兵衛が先妻ゆうれいと  
となり来たりし事」



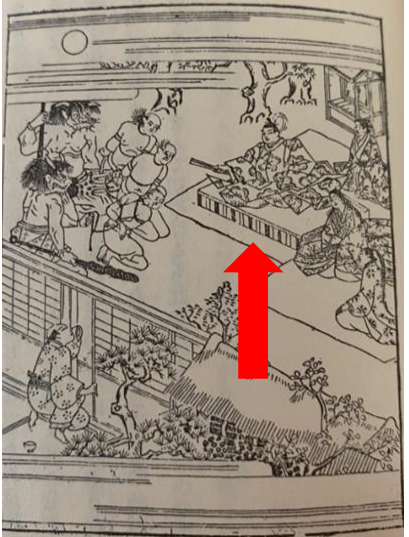
『諸国百物語』「栗田左衛門介が女ぼう  
死して相撲を取りに来たる事」



『諸国百物語』「吉利支丹宗門の者の幽霊  
の事」



『新説百物語』「沢田源四郎幽霊をとぶらふ  
事」



『御伽百物語』「五道冥管」



『諸国百物語』「端井弥三郎幽霊を舟渡し  
せし事」

△幽霊画の引用△

- ・ 太刀川清『百物語怪談集成』（株式会社国書刊行会、一九八七年）
- ・ 太刀川清『続百物語怪談集成』（株式会社国書刊行会、一九九三年）

(二) 先行研究

○諏訪春雄『日本の幽霊』(岩波書店、一九八八年)

「足のない幽霊を描くもっとも古い資料は、いまのところ、寛文十三年(一六七三)刊行の古浄瑠璃『花山院ささきあらそひ』である。」

○太刀川清『近世怪異小説研究』(笠間書院、一九七九年)

・序文と各話の教訓的叙述から『太平百物語』は伽婢子系と百物語系を併合した作品である。『太平百物語』とはまさに百物語にして伽婢子系の怪異小説であった。序文のような教訓的内容は各話の文にもみられる。例えば罪のない狐に石を投げつけた人間が狐に仕返しをされることで後悔をする話や、貪欲な医者が狐の仕業とも知らずに薬の材料欲しさに石仏を治療させられて改心する話などは怪事で非道や貪欲な根性を戒めようとするものである。(発表者要約)

○太刀川清『伽婢子』の創作意図(『長野県短期大学紀要』第三二号、一九七七年二月)  
・『伽婢子』は『剪燈新話』の翻案が十八話ある。また『剪燈新話』によった『伽婢子』の幽霊話の作者である浅井了意が典拠を変更した部分として、幽霊が生まれ変わることや生前のありし日の姿で現れるという幽霊と再生を結びつけることは了意の幽霊への解釈への一つである。(発表者要約)

○高岡弘幸『幽霊 近世都市が生み出した化物』(吉川弘文館、二〇一六年)  
「応挙が生まれる一年前に刊行された『太平百物語』巻二の一四『十作ゆうれひに頼まれし事』でも、『腰より下はなくして』と記されている。また検討の余地は残されているが、一七世紀後半頃から、幽霊の『足』がおぼろに霞んだり、見えなくなったのはまず間違いないことであろう。」

先行研究では幽霊の足の有無に関して百物語作品を取り上げての検討はあまり進んでいないように思われる。また太刀川氏は『太平百物語』が『伽婢子』から教訓的内容を受け継いでいることを述べている。しかし『伽婢子』が『太平百物語』の典拠として用いられていることなどは述べられておらず幽霊の視点からの共通点も述べていないため、本発表では以下二つの視点から考察する。

(a) 幽霊を軸とした『太平百物語』と『伽婢子』の関係性。

(b) 『太平百物語』の足のない幽霊はどこから影響を受けたか。

二、作品梗概

○管生堂人作・高木貞武画『太平百物語』

一七三二年(享保一七年)に刊行。五卷五十話を収めた作品。

## 〔梗概〕

### ・卷二「十四 十作ゆうれひに頼まれし事」

大坂の町で毎夜幽霊が出る噂があった。ある夜に十作という者がそこを通った。すると背後から呼びかける女の声があったから振り返ったが、誰もいなかった。また少し行くと、再び呼び止められるので立ち止まりよく見ると、二十歳程度の青ざめた女の姿があった。腰から下はなく、髪を乱してさめざめと泣いていた。十作は恐れることなく、なぜ呼び止めるのか聞くと、女は「私はこの辺りの者で、嫉妬のために奥方に殺された。その恨みが晴れず毎夜人に呼びかけるが、皆私の姿に恐れるばかり。しかしあなたは答えてくれた。私は腹に子がいて、その子がいまだに死なず、腹が苦しくてならない。あなたの刀で、私の腹を切ってくれ。」と言う。さすがの十作もこれには気味悪くなり断ろうとしたが、女が願いを叶えてくれないと害をなすというので、十作は腹を切ってやった。すると「嬉しや。本望が叶った。」という喜びの声とともに、女の姿は消え失せた。

### ・卷四「三十五 三郎兵衛が先妻ゆうれひとなり来たりし事」

河内の国に三郎兵衛という百姓がいた。夫婦の仲も良く共に暮らしていたが、妻の容態が悪くなり次第に重篤となる。そして妻は、「私が死んだ後には後妻を娶って、子供を守り育ててこの家を継がせよ」と言い残し死んでしまう。三郎兵衛は妻の遺言の哀れさに一人で子供を育てるが、次第に周りから後妻をすすめられる。三郎兵衛は中々承知しなかったが、子供のことを想って後妻を娶った。さて祝言の儀式を行うが、三郎兵衛が縁側から座敷に入ろうとした時、ふと軒の方を見れば死んだ妻が座敷の様子を見ていた。三郎兵衛は驚き、「さては妻はまだ成仏しておらず、後妻を入れよと勧めておきながら、嫉妬の念から祝言を妬み来ているのだ」と思い座敷の中に入る。その夜に三郎兵衛は後妻に先妻の幽霊を見たことを語り、後妻に害をなす前にすぐに家を出るように言う。後妻は三郎兵衛の急な話にうつつむいていた。俄かに気色と声が変わったかと思うと、先妻が後妻に乗り移り「私は後妻を早く入れないかと、毎夜この座敷の縁先まで子の安否を見に来ていた。そして今宵後妻を迎え入れる様を見て嬉しく思った。どうして嫉妬の心を抱こうか。必ずこの女性と良き夫婦になり子を守れ。私には月毎の忌日を忘れずに弔うようにしてくれ。」と言い残し、後妻の身から離れていった。その後は後妻と再び夫婦の酒を酌み交わし、後妻は子を大切に育て、亡き妻の幽霊が来ることもなかった。

## 三、『太平百物語』幽霊比較

### (一)『太平百物語』と『伽婢子』の比較

○『太平百物語』「十四 十作ゆうれひに頼まれし事」と「三十五 三郎兵衛が先妻ゆうれひとなり来たりし事」の特徴を挙げた。『太平百物語』以前の他百物語作品には次の①②の特徴がみられないため(三頁の表参照)、以下の二つの視点を取り上げる。

△特徴▽

①幽霊に子供がいる。

・「わが腹に子をやどりしが、死せずして胎内甚だくるし。」(「十四 十作ゆうれひに頼まれし事」)

・「三郎兵衛は妻が遺言の不便さに、取り分き一子をいたはり育てける」(「三十五 三郎兵衛が先妻ゆうれいとなり来たりし事」)

②夫が他の女性とも関係を持っているが後妻打ちの展開にはならない。

・後妻打ち<sup>うわなり</sup>…本妻が後妻に嫉妬して後妻を乱暴に扱うこと。

・「一子の為と思ふより、ぜひなく後妻を定めける」(「三十五 三郎兵衛が先妻ゆうれいとなり来たりし事」)

※「十四 十作ゆうれひに頼まれし事」の話については、後妻打ちの展開になっている。

『太平百物語』の幽霊話二話では足のないこと以外の特徴として、まず①の幽霊に子供がいる点を指摘できる。また②の特徴については「三十五 三郎兵衛が先妻ゆうれいとなり来たりし事」のみにみられる特徴であるが、『太平百物語』以前の百物語作品は三頁の表のようにならぬが他の女性と関係を持っている場合は後妻打ちの展開になっているため、特に際立つ特徴と言える。

7

○『伽婢子』と『太平百物語』①②の特徴比較  
・『伽婢子』

江戸前期の仮名草子。浅井了意作。一六六六年(寛文六)刊。六十八話から成る短編小説集で、中国文学に構想を借りた翻案小説である。

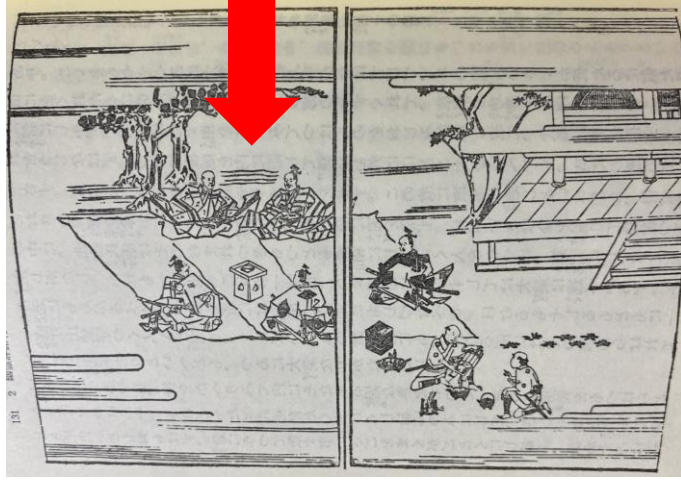
△『伽婢子』と①②について▽

八〜九頁の表は幽霊が登場する話のみをまとめたもの。典拠については江本裕『伽婢子1』(平凡社、一九八七年)・江本裕『伽婢子2』(平凡社、一九八八年)を参考にした。

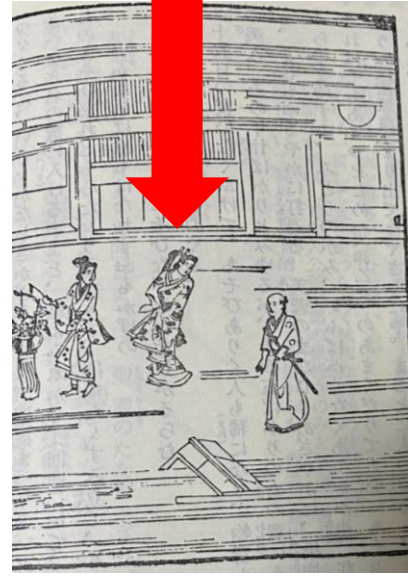
卷	①	②	備考	典拠
卷二「真紅撃帯」	×	○	②男は死んだ女の妹とも関係を持つが後妻打ちの展開にはならない。男と契りを交わす時の妹は本当は死んだ妻であった。	『剪燈新話』卷一「金鳳釵記」
卷三「牡丹灯籠」	×	○	②男が死んだ後、女と手をつなぎ一緒に歩く男の姿が見られる。しかし女の幽霊が男に害を与える内容となっている。	『剪燈新話』卷二「牡丹燈記」
卷四「幽霊逢レ夫話」	○	×	①女が生きている間に子供を産む。 ②男は他の女と関係を持たない。女も死んだ後に他の男と関係を持たない。また二人は再び契りを結ぶ約束をする。	『靈鬼志』「唐暁」
卷五「幽霊評ニ諸将」	×	×	幽霊は男で男女の関係はない。	『剪燈新話』卷四「龍堂靈会録」
卷五「原隼人佐鬼胎」	○	×	①幽霊となった後に子供を産む。 ②男は他の女と関係を持たない。	『中朝故事』「代説鄭畋」(典拠について検討の余地あり。)
卷六「遊女宮木野」	×	×	②女は貞節を守るために自死する。その後男子に生まれ変わるため男に会いに来るように伝える。	『剪燈新話』卷三「愛卿伝」
卷七「中有魂形化契」	×	×	②男は女が幽霊であることを知っても変わらない愛情を持つ。女が消えた後は恋焦がれて死んでしまう。	『靈鬼志』「王元之」
卷七「死亦契」	×	×	②幽霊となった女と別れた後は出家して二度と山から出なかった。	『靈鬼志』「柳參軍」

巻							
巻八「哥を媒として契」	×	×	②女は貞節を守るために殺される。男は幽霊となった女と再会して、別れた後は発心して山にこもるが病で死んでしまう。	『金鰲新話』第二「李生窺墙伝」			
巻八「幽霊出て僧にまみゆ」	×	×	幽霊は男で男女の関係はない。	『曾呂里物語』巻二「行の達したる僧には必しるし有事」			
巻九「金闍寺の幽霊に契る」	×	×	②女が幽霊と知りながら共に暮らす。女と別れた後は二度と妻を求めなかった。	『剪燈新話』巻二「滕穆醉遊三聚景園」記			
巻十「折て幽霊に契る」	×	×	②あの世で会う約束をする。	『才鬼記』「曾季衡」			
巻十二「幽霊書を父母につかはす」	×	×	②死んだ後も一緒にいる男女。	『剪燈新話』巻三「翠翠伝」			
巻十三「幽鬼嬰兒に乳す」	○	×	①女が死ぬ前に産まれた子供。 ②死んだ女が幽霊となって子供の世話をしに来る。男も初めは驚いたが、その後は夜も語り明かすほどむつまじくなる。	『鉄圍山叢談』「河中有姚氏云々」			

『太平百物語』の二話にみられる①②の特徴は『伽婢子』では一部のみにみられた。『伽婢子』の幽霊話ではそもそも男が他の女と関係を持つ話が少なく、その代わりに男女共に一途に想い合う内容のものが見られ、作者が一途な男女関係を意識していたと考えられる。また『伽婢子』では女が死に、幽霊となって男の所に来ることで、死後の世界でも夫婦となる約束をするという話の展開が見られた。



「幽霊評」諸将」



「牡丹灯籠」

△相違点▽

『太平百物語』の幽霊と大きく異なるのは『伽婢子』の幽霊には足があることである。十  
 十一頁に『伽婢子』の幽霊画を載せた。赤い矢印は幽霊を指している。



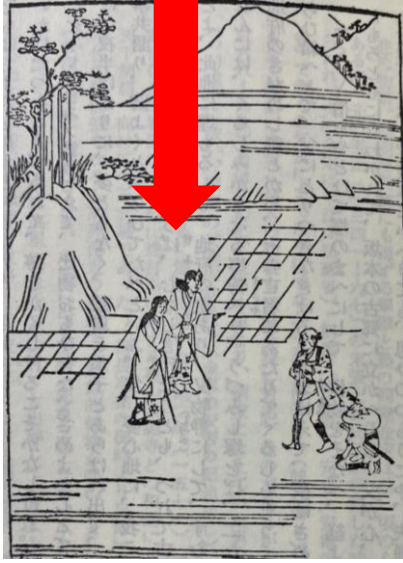
「遊女宮木野」



「原隼人佐鬼胎」



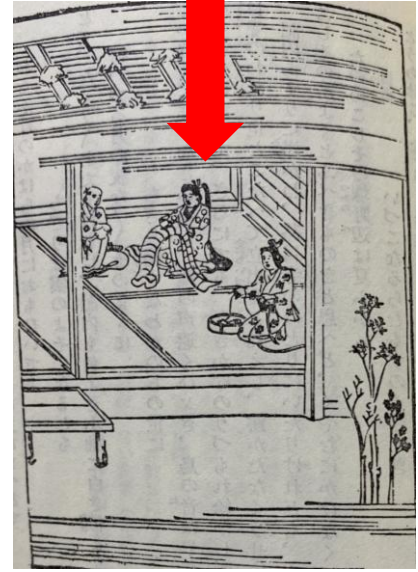
「幽霊逢」夫話」



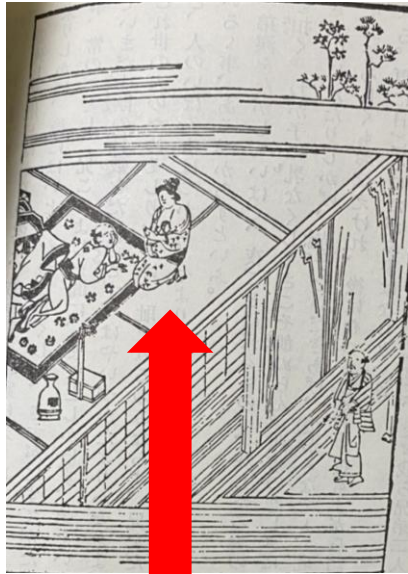
「幽霊書を父母につかはす」



「金閣寺の幽霊に契る」



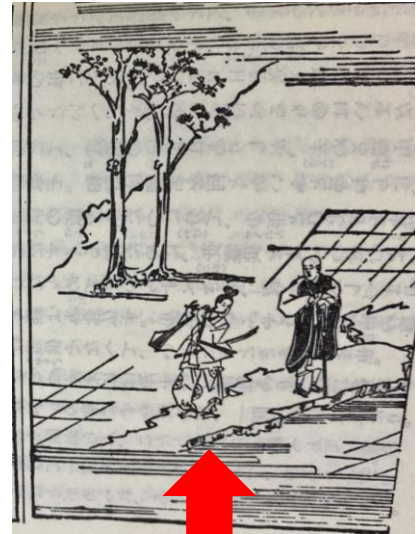
「中有魂形化契」



「幽鬼嬰兒に乳す」



「祈て幽霊に契る」



「幽霊出て僧にまみゆ」

△幽霊画引用▽

- ・ 江本裕 『伽婢子1』 (平凡社、一九八七年)
- ・ 江本裕 『伽婢子2』 (平凡社、一九八八年)

○『伽婢子』と『剪燈新話』

『伽婢子』幽霊話の典拠として六話と最も多く用いられている『剪燈新話』に注目し、九頁で述べた『伽婢子』にみられる一途な男女を『剪燈新話』と比較しながら、本文を引用した。『伽婢子』は(※注一)から、『剪燈新話』は(※注二)より引用した。

・『伽婢子』巻九「金閣寺の幽霊に契る」

【男】

幽霊である女と別れる場面とその後の様子。

むねこがれ、身もだえて、かなしき事かぎりなく、血の涙をながしてしたへ共かなはず。(中略)官職を辞退して、独りさびしき床におきふし、たゞ此人の面影のみ、立はなれず、なげきにしづみ侍べりしが、二たび妻をももとめず、小原のおくに引こもり、つゝにその終る所をしらず。

【女】

男と別れる場面。

今は縁つき侍れば、別れをとりまいらする也。もし又これをかなしみて、しみてこゝにとどまりなば冥府のどがめもいかならん。君をさへなやまし侍べらんわざはひかならず遠かるまじ」とて、たがひに涙をながしつゝ、たもとも袖もしぼりけり。(中略)女房立あがり蒔画のはこに香炉をいれて、「これはこのほどの形見とも見たまへ」とて、なく／＼別れて

・『剪燈新話』巻二「膝穆醉遊聚景園」記

【男】

幽霊である女と別れる場面とその後の様子。

遂に袂を分かちて去るも、然れども猶ほ頻頻と回顧し、良久しうして始めて滅す。生は大いに働きて返る。(中略)生は独り旅邸に居りて、配耦を喪ふが如し。試期既に迫るも、亦た心の院に入る無く、惆悵として帰る。親党其の故を問ふに、始めて具さに之を述べ、衆咸嘆異す。生は後終身娶らず、雁蕩山に入りて葉を採り、遂に復た還らず。(「遂分レ袂而去、然猶頻頻回顧、良久始滅。生大慟而返。(中略)生独居レ旅邸、如レ喪レ配耦」。試期既迫、亦無二心入レ院、惆悵而帰。親党問二其故、始具述レ之、衆咸嘆異。生後終身不レ娶、入二雁蕩山採レ葉、遂不レ復還。」)

【女】

男と別れる場面。

妾は終に君子に事へ、永く歓娛に奉ぜんと欲せずんば非ず。然れども、程命に限有り、違越す可からず。若し更に遲留すれば、須らく当に戻を獲べし。妾に損ふ有るも、亦た將に君に利あらざらんとす。(中略)生と別を為し、御みる所の玉指環を解きて生の衣帯に繋ぎて、日はく、異日此れを見て、旧情を忘ること無かれ、と。「妾非レ不レ欲下終事二君子、永奉中歓娛上。然而、程命有レ限、不レ可二違越」。若更遲留、須二当獲レ戻

有<sup>レ</sup>損<sup>ニ</sup>於<sup>レ</sup>妾<sup>ニ</sup>、亦將<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>利<sup>ニ</sup>於<sup>レ</sup>君<sup>ニ</sup>。(中略)生為<sup>レ</sup>別、解<sup>ニ</sup>所<sup>レ</sup>御玉指環<sup>一</sup>繫<sup>ニ</sup>於<sup>レ</sup>生之衣帶<sup>一</sup>、  
一、曰、異日見<sup>レ</sup>此、無<sup>レ</sup>忘<sup>ニ</sup>旧情<sup>一</sup>。」)

右の他『伽婢子』『遊女宮木野』と『剪燈新話』『愛卿伝』、『伽婢子』『幽霊書を父母につかはす』と『剪燈新話』『翠翠伝』においても一途な男女を書いた幽霊話を確認できた。このことから一途な男女関係を書いた幽霊話は『剪燈新話』と『伽婢子』から『太平百物語』②の特徴へと受け継がれていると考えられる。

※注一 松田修 渡辺守邦 花田富二夫 『伽婢子 新日本古典文学大系75』(岩波書店、二〇〇一年)

※注二 竹田晃 小塚由博 仙石知子 『剪燈新話 中国古典小説選8』(明治書院、二〇〇八年)

○『伽婢子』(一六六六年)と『太平百物語』(一七三二年)の間に刊行された百物語作品における幽霊話での①②の特徴比較

・『伽婢子』と『太平百物語』間の作品は資料二頁に挙げた通りだが比較には幽霊話がある作品のみを対象とした。また①②の特徴比較は資料三頁の表にもまとめている。

・『諸国百物語』

①…なし

②…男が他の女性と関係を持つ場合は後妻打ちの展開になる。

巻四「一端井弥三郎幽霊を舟渡しせし事」、巻五「十四 栗田左衛門介が女ぼう死して相撲を取りに来たる事」

・『好色百物語』

①…なし

②…後妻打ちの展開になる。

巻四「死霊後妻を喰殺す事」

・『御伽百物語』

①…なし

②…なし

『伽婢子』が刊行されてから『太平百物語』が刊行されるまでの間に成立した百物語作品では①②の特徴を全て満たす話はなかった。特に男が他の女と関係を持つ場合には後妻打ちの展開になっていた。

(二)足のない幽霊

主に『太平百物語』が刊行された以前の足のない幽霊が登場する作品を年代順に並べた。また日本で足のない幽霊が初めて登場したのは『花山院后諍』であることは諏訪氏が述べている。

○日本の足のない幽霊の文献

・一六七三年(寛文十三年)：『花山院后諍』

↓挿絵(ア)花山院の后をめぐって藤壺と弘徽殿が争う中、怨霊となった藤壺が弘徽殿の前に現れる場面での藤壺は腰から下が描かれていない。

・一六九〇年(元禄三年)：『死霊解脱物語聞書』

↓挿絵(イ)夫に殺された累が菊に憑りつく。

・一七〇八年(宝永五年)：『けいせい反魂香』

↓挿絵(ウ)狩野元信は遠山という遊女と結婚の約束をするが元信は銀杏の前に気に入られ結婚してしまふ。元信を思い続けた遠山は死んでもなお幽霊となって元信のもとにいく。挿絵は足のない遠山の幽霊が己の過去の姿など多数の分身をしている。

・一七一四年(正徳四年)：『持統天皇歌軍法』

↓挿絵(エ)最後の場面で先祖の亡魂が敵の前に現れるが足のない幽霊となっている。

・一七三二年(享保十七年)：『太平百物語』

○中国の足のない幽霊の文献

・一八二〇年(文政三年)：『野乃舎随筆』

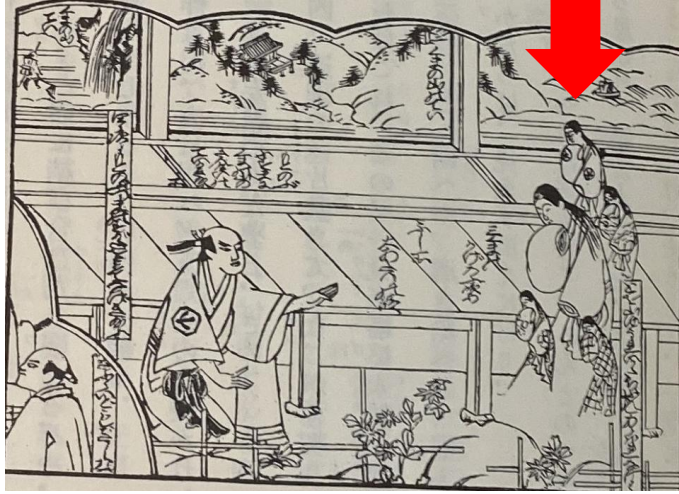
↓『史記』と『五雜俎』を取り上げて日本の足のない幽霊の起源は中国であるかもしれないと述べている。

・(前九一年完成とされる)：『史記』「趙世家第十三」

↓帯から下が見えない三人と出会い祀るように言われる。この三人は本文では三神と表現されている。

・一六一九年(元和五年)：『五雜俎』卷六「幻術」

↓幻術に優れた人物が死人を呼び出すと腰から下は見えない人が現れた。



(ウ) 『けいせい反魂香』



(ア) 『花山院后諍』



(エ) 『持統天皇歌軍法』



(イ) 『死霊解脱物語聞書』

△画像引用元▽

- (ア) △転載▽諏訪春雄『日本の幽霊』(岩波書店、一九八八年)  
(イ) 高田衛『近世奇談集成(一)』(国書刊行会、一九九二年)  
(ウ) 鳥越文蔵 山根為雄 長友千代治 大橋正叔 阪口弘之『近松門左衛門集③ 新編日本古典文学全集』(小学館、二〇〇〇年)  
(エ) 近松門左衛門『持統天皇歌軍法』(早稲田大学図書館、二〇二五年十月二十五日閲覧)  
[https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/he07/he07\\_03029/index.html](https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/he07/he07_03029/index.html)

『太平百物語』が刊行された以前の年代でも、足のない幽霊が『花山院后諍』を初めとして幾つか登場していることから、百物語作品以外では足のない幽霊が書かれており、その流れに『太平百物語』も含まれていることがわかる。また『花山院后諍』『けいせい反魂香』『持統天皇歌軍法』は浄瑠璃作品であり、足のない幽霊と浄瑠璃の関係も今後調べていきたい。

#### 四、まとめ

本発表では以下の二つについて考察をした。

- (a) 幽霊を軸とした『太平百物語』と『伽婢子』の関係性。  
(b) 『太平百物語』の足のない幽霊はどこから影響を受けたか。

まず(a)については、他の百物語作品と比較することで『太平百物語』の幽霊話の特徴として①②が挙げられるが、『伽婢子』では①の特徴は三話、②の特徴は二話しかみられなかった。しかし②に関しては資料八〜九頁にまとめた表の備考部分に『伽婢子』は他の女と関係を持つ男の話がほとんどないと示したこと、また典拠である『剪燈新話』では一途な男が書かれていることから、他百物語作品では男が他の女と関係を持った場合は後妻打ちが発生するのに対して、『太平百物語』では後妻打ちの形にならない話が見られるのは『伽婢子』の一途な男女を書いた幽霊話に影響を受けたのではないか。よって『伽婢子』の一途な愛情を持つ幽霊の特徴は、『剪燈新話』が淵源となり、それが『伽婢子』に流れてさらに『太平百物語』の幽霊話、特に「三十五 三郎兵衛が先妻ゆうれいとなり来たりし事」にみられる一途な愛情に繋がっていると位置づけることができそうである。また(b)については、『太平百物語』の足のない幽霊については百物語以外の作品から影響を受けていると考えられる。

#### 五、今後の課題

- ・ 足のない幽霊について調べると浄瑠璃作品にみられたため浄瑠璃と足のない幽霊の関係、また同じような演劇である能や歌舞伎も含めて足の有無に関する幽霊について調べる。

・足のある／ない幽霊画を髪や衣服、背景描写などの点から比較しつつ影響関係を調べていきたい。

## 六、参考文献

- ・太刀川清『百物語怪談集成』（株式会社国書刊行会、一九八七年）
- ・太刀川清『続百物語怪談集成』（株式会社国書刊行会、一九九三年）
- ・吉田幸一『怪談百物語』（吉田幸一、一九九九年）
- ・諏訪春雄『日本の幽霊』（岩波書店、一九八八年）
- ・太刀川清『近世怪異小説研究』（笠間書院、一九七九年）
- ・太刀川清『伽婢子』の創作意図』（『長野県短期大学紀要』第三二号、一九七七年二月）
- ・高岡弘幸『幽霊 近世都市が生み出した化物』（吉川弘文館、二〇一六年）
- ・江本裕『伽婢子1』（平凡社、一九八七年）
- ・江本裕『伽婢子2』（平凡社、一九八八年）
- ・松田修 渡辺守邦 花田富二夫『伽婢子 新日本古典文学大系75』（岩波書店、二〇〇一年）
- ・竹田晃 小塚由博 仙石知子『剪燈新話 中国古典小説選8』（明治書院、二〇〇八年）
- ・常沂『靈鬼志』（早稲田大学図書館、二〇二五年十月二十日閲覧）  
[https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/i04/i04\\_00139\\_0035/index.html](https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/i04/i04_00139_0035/index.html)
- ・高田衛『近世奇談集成（一）』（国書刊行会、一九九二年）
- ・日本名著全集刊行會『近松名作集』（日本名著全集刊行會、一九二六年）
- ・鳥越文蔵 山根為雄 長友千代治 大橋正叔 阪口弘之『近松門左衛門集③ 新編日本古典文学全集』（小学館、二〇〇〇年）
- ・大橋新太郎『校訂近松時代浄瑠璃』（博文館、一八九六年）
- ・近松門左衛門『持統天皇歌軍法』（早稲田大学図書館、二〇二五年十月二十五日閲覧）  
[https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/he07/he07\\_03029/index.html](https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/he07/he07_03029/index.html)
- ・日本随筆大成編輯部『日本随筆大成』（吉川弘文館、一九七五年）
- ・大石千引『野乃舎随筆』（富山市立図書館、二〇二五年十月十五日閲覧）  
[https://www.library.toyama.toyama.jp/wo/rare\\_book/index?rare\\_book\\_list\\_flg=1&page=12&lines=10&value\\_id=180](https://www.library.toyama.toyama.jp/wo/rare_book/index?rare_book_list_flg=1&page=12&lines=10&value_id=180)
- ・長澤規矩也『和刻本漢籍随筆集』（汲古書院、一九七四年）
- ・吉田抗『史記』（明治書院、一九七三年）